

昭和46年2月1日第3種郵便物認可
平成17年10月1日発行(毎月1回1日発行)
俳句雑誌 沖 第36巻第10号

俳句雑誌「おき」

沖

10月号

創刊
35周年
記念号

沖 発行所

潮流の記憶

能村 研三

秋の海見えてくるまで坂登る
俳人と生業比率水を打つ
永らへて庭の神なる穴惑ひ
クールビズ終りて荒地野菊かな
夏果てて動く歩道の早歩き



鳩亭に父をるごとし芙蓉の実
焼きたてに酢橘走らす一夜干
白瓜の雷干しに日を掬ふ
黙のままとんぶりを食む舌触り
眠りよぶ酒のすすみて無月かな
白寿大須賀力氏二句なほ彫塑に励む爽気かな
秋麗や長寿の顔の愛くるし
起きてすぐ夢と符合の白露かな
数珠玉や嘗ては池のありしとふ
塩振つて香を引き立たすだちや豆

◆ 35周年記念特別作品

冬瓜の黙つて土間に置かれゐし
人生の後期に入る冬瓜汁
葛あらし斜へに張りし根の確か

〈若狭十七句〉

カーナビが秋巡礼の寺探す
隠国の若狭の寺へ素風かな
雨後の風鵜の瀬の里の地藏盆
川音の遠敷おにゆうの軒の地藏盆
廓塀尽きて小浜の地藏幡
朝露明通寺三重塔に古色よろしき塔立てり
秋風の交譲ゆずりぎ木に聞く開山史



羽賀寺まで草刈りし香の案内僧

神宮寺

みせばやの咲いて若狭の水信仰

二月堂へ送る水

水送る鵜の瀬の淵や秋澄めり

拍手打つ仏と神に秋気かな

仏堂に注連縄張らる送りまぜ

へしこてふ鯖の糠漬菊酒に

銀粒の雨冷やかに日本海

鯛雲海の若狭は御み食け国つく

潮流の記憶若狭の秋夕焼

鯖街道秋声つのである峠かな

秋 声

林
翔

ひたすらに沖目指しけり秋の航
白帆かと思へば雲よ秋の航
口あけて初風に近ふ錦鯉
玻璃と玻璃触れ秋声を発しけり
夕べの音楽蝸も鳴き加はれり



茄子の馬捨てられ草の露を飲み
朝顔に羞らひ咲きの紅もあり
妻の留守朝顔さへも破れ咲き
逃げてゆく芋を追ふ手よ妻の留守
三五夜中を新月光の少女をとめゆく
名月を映す泉の金きん汲まな
樽酒の樽の香これぞ新酒の香
琥珀の酒秋気と共に咽喉に入る
酔ひにけり月下に軽き身なりけり
虫の音に流さるるごと下り坂

吾も燃えし遠き日憶ふ曼珠沙華
蓄てふ嬰抱く炎かな曼珠沙華
曼珠沙華散つてかぼそき燠のこす
鳥威しが吾を威して夜明けたり
たつぷりと風載せ葛の広葉かな
登四郎在らば九十四歳菊の秋
教へ子も喜寿と聞きける菊日和
ただ黄なり黄なり魁けもみぢ葉は
湯煙を透きても濃しや山紅葉
空よりの光しんしん実紫



巢を揺らす風に安住秋の蜘蛛
秋天を衝く野良猫の飢ゑの耳
井戸ありしかの日関東震災忌
清^{すが}しさの天地^{あめつち}あれな今日白露
秋の句座耳鳴りのみの寂けさよ
颱風は遠しと狐嫁に入る
わが家に万の雨だれ素破颱風
秋霖やペーブメントに下駄の音
仄赤き服が近づく霧の中
ここにこそ命ありけれ魯伸ぶ

◆ 35周年記念特別作品

蒼茫集



スイッチバック 坂本京子

スイッチバック万緑を逆撫です
向日葵や向き一斉の怖ろしき
暑に耐ふる前頭葉も石ころも
分水嶺つれなき嶺の夕焼けて
胸中に欲しき風みち枝払ふ
虫しぐれ闇ふくらみつ凋みつつ

夏の雨 安居正浩

水中花いまは男も細面
神輿過ぎしあとの余白にただよへり
手ごころは偽のやさしさ花水
思ひ出を匂ひに変へる夏の雨
炎帝へ腕まくりする意地すこし
盆菓子の色あざやかに売れ残る

風のささやき 田所節子

かなかなは山湖の風のささやきか
風涼しテントに星の色透けて
雲海や達成感に息はづみ
雲海を見下ろし羽化のころもち
山頂を極めし髪を洗ひけり
くらがりに貝が水噴く星祭

流 燈 北川英子

船籍のまぎるもあらむ烏賊釣火
我が訪はねば無縁墓かな炎天下
水かけてまたかけて去る西日墓
ここでもう追へぬ流燈手を振りて
救急車盆渋滞を縫ひゆくも
肺いつぱい秋初風や山上湖

潮鳴集



鱧 鮓 渡辺輝子

ドライフラワーさはさは鳴らす暑に負けて
卓上の螢袋は触るるもの
夕風や雲湧く沖の発光す
大皿の鱧鮓葉蘭を湿らせて
盆僧が檀家廻りのバイク飛び

海 風 田山登喜子

秋夕焼対岸の樹を近くせり
けさ秋の風くる方へ膝がしら
盆路の夫に海風贈りたし
蝸の声の重なる長屋門
震度4うしろの鈴虫黙りきる

風の高さ 松井志津子

風の高さに纏れてからす瓜の花
帰省子にわづかの痩せを気付かるる
焼夷弾のむかしがはつと烏賊釣火
いわし雲三日寝込みて海女逝けり
潮くらく寄せみて夏の終りかな

雲の峰 長谷川千枝子

気を抜けば背筋くづるる雲の峰
おほらかな類想もよし揚花火
フォークダンス汗の手繋ぎ直しては
草むしる団子虫ほど屈まりて
軒風鈴そろそろ水を買ひ足しに

沖三十五周年記念コンクール入選発表表

俳句の部

入選一位	「力	布	高橋あゆみ
入選二位	「一	樹	岡部玄治
入選三位	「五	能線	鎌田 亮
佳作一席	「鎮	守祭	宮坂恒子
佳作二席	「取つておきの		福嶋千代子
佳作三席	「鍵		工藤 進
佳作四席	「干	瀉	渡部節郎
佳作五席	「絲綢之路		杉本光祥
努力賞	「歩むなり		坂 ようこ
努力賞	「孤	峰	中尾公彦

論文の部

●兼題部門

入選一位 「試論 能村登四郎の背景」 秋葉雅治

入選二位 「能村登四郎俳句の原点」 安居正浩

●自由部門

入選一位 「類想・類句について」 堀口希望

入選二位 「俳句等価変換論」 上谷昌憲

随筆の部

入選一位 「白 い 服」 谷口みちる

入選二位 「蘇州への旅」 白井剛夫

佳作一席 「花の途中」 石田 静

佳作二席 「青空のむこうに」 坂本 緑

佳作三席 「ダブル・ブッキング」 小野島 淳

35周年記念俳句コンクール入選1位

力 布

天童川へ奔る水音春立てり
冴返る焼かれてもなほ竹の性
甘露煮の鮎の目つつく春祭
パレットに指通す穴下萌ゆる
春寒し湖上に夜間飛行の灯
湖荒れの日やまず雛祭
正座して式服畳む春の雪
すきとほる水まだ硬し芹を摘む
マリンバの明るい音色雪解川
下駄箱に納まらぬ靴山笑ふ
文鎮の魚のかたち水温む
グラシン紙の封書の小窓鳥帰る
青竹で組まるる四つ手童天に
鮎上る湖国の水の明るさに
腰のある甲斐のはうたう暖かし



高橋あゆみ

感想

沖創立三十五周年に因み今回のコンクールの句数は三十五句でしたが、この句数は私にとってまさに未知の世界でした。

初めはどこから手をつけて良いのか途方に暮れましたが、試行錯誤の末、生まれ育って来た風土を縦糸にそして今、生きて感じている事を横糸に三十五句を一枚の布の様に仕上げる事ができました。

一句一句に思いを込めながら清書し終えた時は、肩の荷が下りたような安堵感と、やり遂げた充実感で胸が熱くなりました。

この度「沖」三十五周年の記念すべきコンクールに入選一位とのお知らせ

花種を蒔く再びの二人きり
 青き踏むズボンの裾の力布
 天井に窓のあるバス木の芽晴れ
 屋根付の檜のポスト初つばめ
 車麩の輪切りを崩す遅日かな
 つばくろの腹の真つ白明日は晴れ
 初蝶来湖の向うの野の平ら
 すぐそこに湖ある暮し風光る
 忌返しの玉露封切る朧かな
 茶葉の縊りゆつくり戻る桜冷え
 糸寒天ふやけきつたる花曇り
 亀鳴くやカルテのラベルとれかかり
 裏山に父母眠る花吹雪
 水浴びに鳥の来てゐる復活祭
 青空の極み落葉松芽吹きけり
 ぶらんこを漕ぐルノワールの絵のやうに
 真直ぐな退屈な道麦青む
 手のひらで測るカーテンみどりの日
 解凍の魚に日付け若葉風
 裂いて織る木綿のシート夏隣



を頂きましたが、完成までの道のりが
 胸中を過り感無量です。研三先生、林
 先生、審査をして下さった皆様に心よ
 り御礼申し上げます。
 そして今日までご指導下さいました
 総ての方々に深く感謝致します。有り
 難うございました。

略歴

昭和27年 長野県生れ
 平成10年 10月 初投句
 平成12年 6月 初巻頭
 平成13年 コンクール 努力賞
 平成14年 コンクール 佳作6位
 平成15年 コンクール 佳作1位
 平成16年 沖 新人賞 同人
 俳人協会会員
 コンクール 入選1位

沖作品



能村研三選

東京 工藤 進

四万六千日箱を鳴らして引くみくじ
壁泉の水の音譜の今アレグロ
手花火の膝下に小さき闇ありぬ
音叉にも似たる羽蟻の発ちにけり
ケルン積む詩の言霊を積むやうに
黒牛に値の付き島の星祭
古代蓮ピノキオの鼻伸びにけり
避暑期来る空気枕を膨らませ
向日葵の一番星に傾ぎけり
父に焚く送り火語り足らざるや
滝行者風呂敷包一つあり
炎帝に捧げて白き濯ぎもの
ゴンドラのごつんと着きぬ山開
雨音のつつむ温室夏の風邪
文芸を論じ八月十五日

中尾 公彦

坂 ようこ

千葉 林 昭太郎

アスファルト匂ひて兆す日雷
少年期燻つてをり花火の香
紙コップ握りつぶして炎天へ
向日葵は種に少女は母親に
フライパン青き煙を立てて秋
初胡瓜息ととのへて撈ぎにけり
ただならぬ世を離しみる夕端居
でで虫の殻に経文らしきもの
まじまじと吾を見てみる羽抜鶏
螢を鏤め寝落つ聚落十戸
帆船の結び目堅く夏に入る
炎暑来て両手に重き火繩銃
涼しさの音軋ませて葎梯子
試し酒よばれ涼しき仕込蔵
初秋の樽にかなひし尺貫法

新潟 長谷川 春

岩手 栗城 静子

茅の輪くぐる夫より一歩さがりけり
朝涼や村長の竿水を釣る
田水沸く土中の声の湧きに湧く
国原やいづくより湧く青田風
深呼吸青田の風を憚らず
太陽の入水の飛沫ゆふやは
匙といふかたち全き氷水
宙にあらば散開星団蕙の花
炎日の癩症にとる豆のすぢ
螢火のわたくしごころ明滅す
盆波やはるかにひかるみをつくし
ひとすぢの草からまりし籐筵
香水の半端な減りも遺品めく
口ごもる言葉より汗先に出づ
唇に氷水よりひえし匙
袖口に風のそよめき藍浴衣
浮島のかげより生れて糸蜻蛉
舟虫が子らの声より早く散る
夕風に透きぬてからす瓜の花
喪ごころや百合の香りの日もすがら
徳利の薩摩でありし涼新た
背泳ぎのまづは地球に浮ぶなり
盆支度夫の知らざる孫いくたり
ひい祖母となりてしまひし桃する
さいはての花野の風をまとひけり

奈良

福山 悦子

千葉

井原 美鳥

埼玉

服部 早苗

市川市

栗原 公子

千葉

佐久間由子

市川市

安齋 峰子

千葉

安藤しおん

東京

齊藤 實

石川 笙児

新人賞予選句（十月）

ワキ方の背筋涼しき能舞台
雄松の疵なほ脂噴けり終戦忌
映像の宇宙に端居ときめける
鶉の家に獣医のバイク夏果つる
蟬はみな海傾けて鳴いてをり
炎天の力点となる高気圧
開け放つ空の青さよ蕎麦の花
訪ふ家の零余子拾ひに加はれり
江ノ島の橋の長さや白日傘
向日葵や子に反骨の喉ぼとけ

音叉にも似たる羽蟻の発ちにけり
黒牛に値の付き島の星祭
炎帝に捧げて自き濯ぎもの
向日葵は種に少女は母親に
螢を鏤め寝落つ聚落十戸
帆船の結び目堅く夏に入る
田水沸く土中の声の湧きに湧く
太陽の入水の飛沫ゆふやは
螢火のわたくしごころ明滅す
口ごもる言葉より汗先に出づ

工藤 進

中尾 公彦

坂 ようこ

林 昭太郎

長谷川 春

栗城 静子

福山 悦子

井原 美鳥

服部 早苗

栗原 公子

沖作品 選後句評

*
能村研三

音叉にも似たる羽蟻の発ちにけり

工藤 進

俳句を詠むとき、どうしたら人が作らない句を詠めるかというところに苦心する。ありふれた素材であれば、すでに人が作った句と同じような句になってしまいが、人があまり詠まないような変わった素材を俳句に詠めば、そこから新しさが生れる。しかし、なんでも新しがつて変わった素材ばかりを狙えば、奇をてらうことにもなりかねない。しかし、この句の場合は音叉というめずらしい道具に詩的な要因を探り出した。音叉は余り一般的な素材ではなく昔学校の音楽の時間に使ったことが記憶に蘇るが、特定の高さの音を発する道具で、楽器のチューニングに使われる。音叉は響きあい、唸りあつて静寂のなかに広がってゆく。もしかしたら、羽蟻が発つときの音なき音というか周波数のような音を音叉は発するのも知れない。もう一句「手花火の膝下に小さき闇ありぬ」の句、手元の花火の明るさに反して膝下は余計に闇の暗さを感じる。写生を効かした句である。

黒牛に値の付き島の星祭 中尾 公彦

沖繩に程近い黒島という小さな島には、その島の人口より多く黒牛がいるそうだが、そうした自然環境で育った牛たちはさぞ幸せなことだろう。黒牛は乳牛とは違って役牛や食肉用に使われるが、仔牛のときに売られて、それから餌を与えるという話を聞いたことがある。いずれにせよ、一頭、一頭を丹精をこめて育てあげた黒牛、餌も青草とわらに米のとぎ汁を温めて糠を混ぜたものを柔らかくして食べさせ、また毛並みを揃えるためブラッシングもした。そんな黒牛を売る生業にしている以上、牛との別れは仕方がない。取引先との間で値がついたのだが、牛への愛情が生れて、何だかやるせない気持はいつも変わらない。折しも、その夜は星祭で、島の夜空は満天に星が瞬いていた。もう一句、「向日葵の一番星に傾ぎけり」の句、日中、太陽に向かって咲いていた向日葵も、夕暮れ近くなつて一番星がでて初めて安らぎの時間となった。

炎帝に捧げて白き濯ぎもの 坂 ようこ

この句は、日常の何でもない生活の中から生れた句であるが、炎帝を登場させることによって、詩的昇華をなし一句が格調高いものとなった。主婦であれば、晴れた日は毎日洗濯をする。まして夏ともなれば、汗をかいた白いシャツなどその数も多い。白い洗濯ものが干された物干し竿を太陽がざらざら輝く干し場にぐいとい掲げた。「白き濯ぎもの」とは、家族の皆の健康の象徴でもあり、皆が毎日健康であることを炎帝に感謝しつつそれを捧げた。もう一句、「文芸を論じ八月十五日」の句、戦後六十年の今年は、特に八月十五日に対する感慨は一入のものがあった。この日を境に、自由な文芸の論議も始まった。(以下略)